

国際交流助成事業報告書

薬学部 5 年次生 K.E

1. はじめに

この度、2026 年 8 月 15 日から 8 月 22 日までの 8 日間、シンガポールで行われた STEER visit(薬学国際交流プログラム)に参加させていただきました。この研修で経験したこと、学んだことを報告いたします。

私が本研修に参加する目的は、大きく分けて 2 つありました。1 つ目は、医療制度の比較分析と日本への適用に関する考察を行うことです。日本とシンガポールの医療制度および薬事行政の推進体制を比較・考察し、シンガポールにおける先進的な取り組みの中で日本の医療・薬局現場に応用可能な知見を見出すことに加えて、国際的な比較視点を介して日本が誇る国民皆保険制度の優位性と課題を客観的に再認識し、今後の医療現場や薬局運営における課題解決への示唆を得ることです。

2 つ目は、国際的なコミュニケーション力および実践的な対話力の向上です。異文化や異なるバックグラウンドを持つ現地医療関係者・参加者との積極的なディスカッションを通じて、グローバルな環境下で自らの考えを正確に伝え、多角的な議論を展開できる実践的な語学・コミュニケーション能力の向上を図ることです。

現地の学生と一緒に感染症や高血圧の講義の受講、National University Hospital、Guardian Pharmacy、Tengah Polyclinic を見学し、様々なことを学ぶことができました。私は、Tengah Polyclinic について詳しく報告致します。



薬学部棟の入口



シンガポール国立大学病院

2. Tengah Polyclinic について

Polyclinic とは、シンガポール政府が運営する公立の総合診療所で、地域住民が日常的な医療を安価で受けられる「地域のかかりつけ総合クリニック」のような役割を担っています。一般内科の診察だけでなく、予防接種、慢性疾患の管理や処方調剤まで 1 ケ所でカバーしています。シンガポールの公立大病院に直接行くと高額な初診料がかかりますが、Polyclinic を経由して紹介状を出してもらうことで、大病院での受診費用も補助金適用(安額)になります。

Tengah Polyclinic で診療される主な疾患は、高脂血症、高血圧、糖尿病、急性上気道感染症、慢性腎臓病です。Tengah Polyclinic では、1 日の処方箋枚数が 200~300 枚程度であり、系列の大きい Polyclinic では、800 枚程度/日であるとのことでした。また、一般的な外来調剤にとどまらず、薬剤師の専門性を活かした様々な先進的なサービスが展開されていました。特に印象的であったのが「薬剤師外来クリニック(Pharmacist-run clinics)」です。特定疾患や薬物療法管理に特化した専門外来を薬剤師が運営しているとのことでした。具体的には、禁煙外来、服薬管理外来、抗凝固療法外来、生活習慣病外来などです。

安定期虚血性心疾患(IHD)における共同ケアプログラムの取り組みについても学びました。「IHD Shared Care Programme」は、国立循環器センター(National University Heart Centre, Singapore)の循環器専門医と Polyclinic の臨床薬剤師がタッグを組み、慢性疾患を共同管理している代表的な取り組みです。従来治療では専門外来で 6~9 ヶ月ごとのフォローアップを行っていたのに対し、共同ケアでは 4 ヶ月ごとに Polyclinic の臨床薬剤師が経過観察を行い、年に 1 回専門医が年次レビューを行います。この連携により、平均 LDL コレステロール値が従来治療の 1.90 mmol/L から 1.55 mmol/L へと改善し、質の高い患者アウトカムが得られることが実証されていました。



調剤用医薬品の保管棚(ピッキングエリア)



各階をつなぐ薬剤運搬用
コンベアシステム

3. シンガポールについて

シンガポールの気候は湿気が非常に高いものの、暑さ自体は日本の夏と比較して穏やかな印象を受けました。シンガポール国立大学(NUS)から市内中心部までは、最寄り駅から地下鉄(MRT)を利用することで、約1時間で移動可能でした。公共交通機関が発達しており、放課後の移動もスムーズに行うことができます。夕方からの時間帯を活用して、現地学生が観光もかねて有名な屋台に連れて行ってくれました。

レイン・ボルテックス(チャンギ空港内)



ホーカー



ホーカーでの食事(福建麺)

4. 終わりに

今回、同じ大学の学生 2 名とともにシンガポール研修に参加し、日本との違いを多く学びました。なお、今回の研修で訪問した National University Hospital、Guardian Pharmacy での学びについては他の 2 名が報告しているため、ぜひそちらもご覧ください。

1 つ目は、現地学生の講義に参加して感じたことですが、学習姿勢の主体性です。多くの学生が PC を活用して事前に配布される講義資料を元に予習して能動的に講義に臨み、講義後も積極的に教員へ質問し、教員も親身に対応されていました。

2 つ目は多言語環境です。多民族国家という背景もあり、2 言語以上を話す人が多く、病院内でも専門用語を含め英語と中国語が飛び交っていました。現地の様子を見ていて、単に興味として言語を学ぶというよりも、英語と中国語のように、生きるうえで 2 言語以上マスターすることが当たり前の環境なのだと強く感じました。

医療現場のグローバル化が進む中、英語の重要性は増していますが、日本人薬剤師の語学力不足は課題だと感じました。薬剤師が英語力を身につけることで、海外での学びや活躍の場が広がり、現地で積極的に質疑応答を行うことで知見を深め、日本の医療制度の更なる発展や成長に貢献できると強く実感しました。

最後になりますが、温かく気にかけてくださった先生方、気さくに交流してくれた現地の学生、海外研修と一緒に参加した中国の学生の皆さんの優しさに心から感謝いたします。結びとなりますが、本国際交流事業をご支援くださった皆様、ならびにシンガポール国立大学 (NUS) の先生方や関係者の皆様に深く感謝申し上げます。